2023年3月26日 佐土原キリスト教会 礼拝説教
聖書箇所：マルコ15章21～32節
タイトル：十字架を負って

「パッション」という映画のことを前回も話題にしましたが、映画「パッション」は「ゲッセマネの園のイエス様の祈り」に始まり、「イエス様が十字架の上で息を引き取られるまで」を克明に描きます。最後にイエス様が墓の中で甦る場面もありますが、中心はイエス様の受難です。この映画を監督したのは「メル・ギブソン」という人です。この人は、子供の頃でしょうか、顔が―(病気がケガかで)―グチャグチャだったことがあったそうです。ある時、カトリックの神父さんが「あなたがイエス・キリストを受け入れるなら、私が整形外科医を世話しよう」と言って世話をしてくれました。お金も出してくれました。それでメル・ギブソンは、前に向かって生き直す希望を与えられた―(救われた)―のだそうです。それ故に彼は「私はキリストに借りがある」と言っていた。その借りを返すために、私財を投じて作ったのが映画「パッション」だったということです。

映画の中でローマ兵に痛めつけられながら十字架を運ぶイエス様を見て、私は一瞬「誰か助けに来ないものか」と思いました。もちろん誰も来ません。正義の味方は現れませんが、ただ1人、イエス様に手を貸すのが、今日の箇所に登場する「シモン」なのです。今日はこの個所から、特に「シモン」に焦点を当てて信仰の学びをします。「内容」と「適用」に分けてお話しします。

1：内容～十字架を担いで歩いたシモン

ここに「アレキサンデルとルポスの父で、シモンというクレネ人」(21)が登場します。クレネというのは、現在のアフリカのリビアにあった町です。クレネは、アフリカでもユダヤ人が多く住む町だったようです。その彼がエルサレムに居ました。おそらく「過越しの祭り」をエルサレムで祝うために、クレネからエルサレムに出て来ていたのだと思います。パレスチナ以外に住むユダヤ人にとって、エルサレムで「過越しの祭り」を祝うことは、生涯の夢でした。(もしかしたら、もっと前にクレネから出て来ていて、エルサレム近郊で暮らしていたのかも知れません。「いなか」というのは「エルサレム近郊」のことかも知れません)。しかしいずれにしても、エルサレムでとんでもないことが起こります。

囚人として十字架を運ぶイエス様は、既に散々な拷問や虐待を受けておられました。特にピラトの官邸における鞭打ちは酷いものでした。もう重い十字架を背負う力も尽きておられたのでしょう、運ぶことが出来ない。ローマ兵は、イエスの代わりに十字架を担がせる者を探します。その時に目をつけられたのが「クレネ人シモン」でした。体格も良かったのでしょう。有無を言わさずローマ兵に命じられて、イエスの十字架を担ぐことになりました。「ルカ福音書」には「彼らは、イエスを引いて行く途中、いなかから出て来たシモンというクレネ人をつかまえ、この人に十字架を背負わせてイエスのうしろから運ばせた」(ルカ 23:26)とあります。シモンは、イエス様の歩かれるその直後を、十字架を担いで歩いたのかも知れません。映画「パッション」では、シモンは、イエス様と一緒に十字架を担ぎながら、イエス様に「もう少しだ、もう少しだ、頑張れ」と声を掛けていました。いずれにしても思いもしなかったことが彼に起こったのです。それは、ただ「重い物を背負わされる」ということだけでなく、イエス様がこの時受けておられた辱めを、自分も共に受けなければならない、身に引き受けなければならない体験でした。

しかし、この後シモンはどうしたのか。不思議なことにシモンは「あいつのお蔭で無理やり十字架を担がせられたのだ、俺はナザレのイエスなんか関係ないんだ」と腹を立てて、イエスを捨てたのではなかったのです。ここには「アレキサンデルとルポスの父で、シモンというクレネ人」(21)と書いてあります。これは「『マルコ福音書』の読者が当然アレキサンデルとルポスを知っている」という書き方です。「マルコ福音書」は「ローマでローマのキリスト者を読者として書

かれた」と言われます。使徒パウロは「ローマ書」に「主にあって選ばれたルポスによろしく。また彼と私の母によろしく」(ローマ 16:13)と書きました。アレキサンデルとルポスは、ローマ教会の信者だったのだろうと思われます。またその母親を、パウロは「私の母」と呼ぶような親しい関係にあったのです。ということは、シモンはキリスト者になったのではないでしょうか。だから家族もキリスト者になったのです。初代教会において彼は、「イエスの十字架を担いだ人、イエスの十字架の重さを知っている人」として存在したのだと思うのです。

しかし、なぜ彼はキリスト者になったのか。それは、はっきりとは分かりません。しかし「彼がこの出来事から何を知ったのか」、それなら思い測ることが出来ます。何度も「パッション」のことを申し上げますが、ピラト官邸での鞭打ちのシーンは、見るに耐えないシーンです。メル・ギブソンは「なるべく史実に基づいて当時の様子を再現した」ということですから、実際イエス様が受けられた鞭打ちも、それは残酷なものだったと思います。肉が裂けるのです。剥ぎ取られるのです。しかし「マルコ福音書」は、ここで「イエス様の十字架がどんなに残酷な、悲惨なものであったのか」、そういうことを書かないのです。読む人に、イエス様の十字架の苦しみを伝えようとすれば、それを書くことは出来たでしょう。でも、書かない。その代わりに 2 つのことを書くのです。その 2 つのことこそが、シモンが信仰を持つに当たって意味のあることだったのだと思います。

1 つは、29 節以降の「人々がイエス様を嘲笑する場面」です。言葉を換えると、人々の残酷さです。イエス様は、肉体的にも激しい痛みを経験されたでしょう。しかし、イエス様を痛めたのは、むしろこの人々の嘲りの中に現れた残酷さだったのではないでしょうか。それは、すでにイエス様が十字架を担いで歩く時、そしてシモンがイエス様の十字架を担いで歩く時からそうだったでしょう。シモンは、イエスの身になって人々の残酷さを身に受けたのです。人々は言うのです。(意訳します)「お前が十字架から降りるなら、それを見たら、信じてやっても良い。私の神にしてやろう」。残酷なだけではない。「信じてやろう、私の神にしてやろう」、人間が「神」というものを、本音の部分でどう捉えているのか、この言葉はそれを表現する言葉です。人間の罪、何よりも神に対する罪が、ここに現れるのです。そしてまた、その言い方は、荒野でイエス様を誘惑したサタンの言い方に似ています。その意味でも、人間の邪悪さが現れているのです。

シモンは、イエス様と共に人々の言葉を受けながら、今まで見えなかった人間の罪性を見たのではないでしょうか。人はどんなに残酷になれるのか、いや、人は神の前にどんなに罪深い存在なのか、十字架の重さは、人間の罪の重さなのです。だからどんなに救われなければ、変えられなければ、ならない存在なのか、それを知ったのではないでしょうか。

そして、それ以上に「マルコ福音書」が強調するのが、黙って嘲りを受けられるイエス様の姿です。なぜ、イエスは嘲りに対して何も答えないのか。イエス様が十字架に架られる時、24 節に「それから、彼らは、イエスを十字架につけた。そして、だれが何を取るかを決めたうえで、イエスの着物を分けた」(24)とあります。「詩篇 22 篇」で預言されていることがここで起こったのです。「新改訳聖書」をお持ちの方は「27 節の欄外注」として「異本 28 節として『こうして「この人は罪人とともに数えられた」とある聖書が実現したのである』を加えるものもある」とあるのがお分かりになると思います。その言葉は「イザヤ書 53 章 12 節」の引用です。つまりどちらも「旧約聖書」に書いていることが現実になった。後に「聖書」は「キリストが、聖書に書いてあるとおりわたしたちの罪のために死んだ…また、聖書に書いてあるとおり三日目に復活した」(コリント 15:3～4)と書きます。「聖書に書いている通り」とは、「神の意志だった」と言っているのです。イエス様は「罪の中に生き、神さえも嘲り、天国への歩みが出来なくなっている、その人間を救う」という神の決意を断固として行っておられます。ここに神の「救い」の意志が行われている。それを、この箇所は強調しているのです。「人を救う」、それは「天国に入る」というためだけの「救い」ではない、「神が分らない。だから神の祝福を信頼して生きることが出

来ない、祝福を待ち望む者の生き方が出来ない」、そこから救われなければならないのです。宗教改革者カルバンは、「人間にとって最も幸せなことは、どんな時にも神の祝福を信頼し切って生きることだ」と言いました。神の「救い」、それは「幸いに生きるための救い、祝福を生きるための救い」でもある。神は私達に「神の祝福を信頼して生きる生き方」を―(それは「神の祝福に与る生き方」と言ってもよいでしょう、それを)―回復させようとしておられるのです。

いずれにしても「人を救う」、それは神の意志です。その神の意志があるからこそ、罪人の私達でも救われるのです。CS ルイスが次のようなことを言っています。「良いものも、悪いものも同様に一種の感染によってうつるものである。体を温めようと思ったら火の近くに立たなければならないし、濡れたいと思ったら水の中に入らなければならない。それと同様に、歓喜や力や平和や永遠の生命が欲しかったら、それを持っているものの近くに、いやその中にさえも入っていかなければならない。あなたがそれに近づくなら、それから噴き出すしぶきがあなたを濡らしてくれであろう。しかし近づかなければ、乾いたままでいるしかない」(CS ルイス)。シモンはイエス様に近づきました。そして「神の意志」に触れたのではないでしょうか。もちろん、この出来事だけではなくて、後に使徒達の説教を聞いて、イエス様を心から信じたのではないかと思います。

「マルコ福音書」は、「救われなければならない人の罪の現実」を書き、「その罪人を救おうとされる神の意志」を書きます。それが、イエス様の十字架の核心だったのです。

**2：適用～十字架を負って歩くことの祝福**

この箇所から何を学べるでしょうか。聖書学者がこの箇所について共通して言うことがあります。それは「福音書は、ここに―(イエスの十字架を担いで歩いたシモンの姿に)―本来あるべき信者の姿、自分達のあるべき姿を見ようとしている」ということです。どういうことでしょうか。

この箇所から思い出される御言葉は、「マルコ 8 章 34 節」の御言葉です。「だれでもわたしについて来たいと思うなら、自分を捨て、自分の十字架を負い、そしてわたしについて来なさい」(マルコ 8:34)。イエス様は「信仰者は、自分を捨て…十字架を背負って、わたしに従いなさい」と言われました。そして、クレネ人シモンこそ、正に十字架を背負ってイエス様の後を従って歩いた人だったのです。そして福音書が、初代教会が、彼の姿に「信者の本来の姿」を見ているということは、私達は、十字架を背負い歩くシモンをイメージしながら、十字架を担いで歩くということについてもう一度真剣に考えなければならないと思うのです。

十字架を背負って歩くとは、どういうことなのでしょうか。「十字架を負う」とは、本来の意味は「死刑場に向かって歩いて行く」ということです。イエス様がそうであったように「自分が掛けられる十字架を背負って刑場に歩いて行く」、それが「十字架を負う」ということです。その意味で「十字架を負い…」というのは「死に行く」ということです。あるいは「自分を殺す」ということです。

では「自分を殺す」とは、どういうことでしょうか。ある大学の歴史学の先生は、学生がレポートを出すたびにいつもこう質問するそうです。「それで君は何が分かったのかね」。その質問の意味は「分かるということは、本当に分かるということは、分かった時に自分自身が変わるものだ」ということだそうです。私達は、イエス様を信じて、イエス様の教えを素晴らしいと思います。その素晴らしさが分かったつもりになります。でも問題は、「分かっても自分自身を変えない」ということです。どうでしょうか。私達は、「『分かった』と言って、自分を変えようとしない『その頑なさ』」を持って信仰生活をしているのではないでしょうか。「自分を捨て、自分の十字架を負い、そしてわたしについて来なさい―(わたしに従いなさい)」(8:34)、それは「『その頑なさ』を殺して、本当に私の言うこと、すること、それをしっかり学んで、その後を同じようについて来なさい」と言う招きの言葉なのではないでしょうか。シモンは、いわば強いられて自分

を捨てさせられたのです。「自分を殺すことを強いられた」と言って良いでしょう。自分を殺さなければ、恥ずかしい十字架を背負ってイエスと一緒に歩くことは出来なかったのです。しかし彼は、自分を殺してイエスと歩いたのです。そして十字架を背負って歩いた時に、イエス様に触れたのです、「救い」に触れたのです。私達も、十字架を背負って歩く時に―(自分を変えない頑なさを殺して御言葉に生きる時に)―見えるものが、分かることが、あるのではないでしょうか。

ジョン・ロスというメノナイトの学者が言うのです。「キリスト教信仰は、見えない神様が見えるキリストになって下さったところから始まった。(『キリストの受肉』と言います)。そうであれば『信仰は受肉しなければならない―(つまり信仰は、具体的な形を取らなければならない)』」。形にならなければならない。それは、十字架を担いで歩くこと。つまり、イエス様にしっかり学んで、殺すべき「頑なさ」を殺して行くこと、御言葉に従って行くこと、そういう形を取らなければならないのだと思う。その時、私達は、永遠に向かって少しずつ変えられて行くのではないでしょうか。CS ルイスが言っています。「来世でも、現世における行い―(正しい行為や勇気ある行為)―の結果としてのみ生まれるような、そんな人間であることが必要とされる機会は常に存在するに違いない…重要なのは、人々が自己の内部に、そのような品性の少なくとも萌芽をもっていなければ、天国が環境的にどんなにすばらしいところであったにしても、それは彼らにとっては『天国』になりえない――つまり、神が我々のために備えたもう深い、強烈な…幸福を、幸福として味わうことができない、ということなのである」(CS ルイス)。今、私達が十字架を負い、イエス様に従い歩く―(御言葉を生きる)―その時にだけ私達の中に育てられる信仰の実、それが永遠の祝福に繋がるようです。

そして―(これはある本から学んだのですが)―「『自分の『頑なさ』において自分を殺すこと』を学んだら、次は『人を愛する労苦のために自ら死ぬことを学ぶこと』が出来る―(学ばなければならない)」とありました。さらに続けてこうありました。「『私の負うべき十字架はどこにあるのか』と改めて探す必要はない。人を愛することは、既に十字架を負うことである。家族でも、隣人でも、人を愛することは、自分をどこかで殺していなければ、本当には出来ないことである。『キリストに教わらなければ―(キリストに学ばなければ)―本当に人を愛することは出来ない』ということを知るところに、自ら十字架を負う道が生まれる」。

シモンは十字架を負ってイエス様の後を歩きました。私達は、自分の頑なさを変えることにおいても、誰かを愛することにおいても、十字架を負って歩くことを、シモンの姿を、求めて行きたいと願います。そのようにして、この生涯を、天国に向かう二度とないこの道を、一歩一歩大切に歩いて行きたいと願うのです。